

仙台城の顔 大手門



大手門全景(昭和初期 彩色された絵葉書より 個人蔵)

築いた人 伊達政宗^{ただむね}or伊達忠宗^{ただむね}

年代 江戸時代～昭和20(1945)年

場所 青葉区川内^{かわうち}

大手門は、仙台城全体の正門であり、藩主の出入りや特定の儀式にしか開かれない特別な門でした。高さ12.5m、幅20mあり、その大きさは日本の近世城郭^{きんせいじょうかく}でも最大級になります。正確な建築時期は不明で、初代仙台藩主政宗が造ったとも、二代藩主忠宗が二の丸と同時に造ったとも言われています。記録上は明治時代に改修されたのち、脇櫓^{わきやぐら}と共に国宝に指定されていましたが、昭和20(1945)年7月の仙台空襲によって焼失してしまいました。

令和6年、東北大学災害科学国際研究所によって、郷土史家の故・梅津幸次郎^{うめつこうじろう}氏のコレクションのうち、大手門の金具に関する調査成果が発表されました。これらの金具は、大手門焼失後の焼け跡から梅津氏が採集したもので、失われた大手門の姿を今に伝える貴重な資料です。

大手門はいつ造られた？

大手門が造られた時期については、建築の特徴などから政宗が仙台城を築いた慶長期(1596～1615)とする説があります。慶長期は、豊臣秀吉が2回目の朝鮮出兵を行った頃から、関ヶ原の戦いで徳川家康が勝利し豊臣家が滅ぶまでの時期にあたります。

仙台藩では、この慶長期の終わり頃に、仙台城の中心的建物である大広間をはじめ、大崎八幡宮や瑞巖寺など主要な建造物が造られました。大手門もこの頃に建てられた可能性はありますが、確かな答えはわかりません。



日本最大級!! 仙台城大手門跡の発掘調査

古代	平安
鎌倉	
南北朝	
中世	室町
戦国	
安土桃山	
江戸	
明治	
大正	
昭和	



発掘調査地点と大手門の推定位置(北西から)

調査者 仙台市教育委員会文化財課

調査期間 令和5年9月1日～同12月18日
令和6年6月17日～同11月末

場所 青葉区川内

令和5年度から大手門があったと推定される場所で発掘調査を行っています。令和5年度の調査では大手門南辺の柱の基礎の痕跡(礎石跡)が3か所発見され、大手門がこの場所に建っていたことが証明されました。

また、令和5・6年度の調査では加工した石材を両側に並べた溝跡(石組側溝)も発見されました。大手門と脇櫓の屋根の形に合わせてクランク状に巡っており、屋根から落ちた雨水を受けるための溝(雨落ち溝)であったと考えられます。

令和5・6年度の発掘調査では数多くの瓦が見つかりました。その中には昭和20(1945)年仙台空襲によって焼けたため赤く変色した瓦や屋根に鎮座していた鬼瓦が見つかりました。

よみがえる大手門!?

仙台城が廃城となった後も大手門は仙台の顔として市民に親しまれてきました。しかし、仙台空襲によって焼失してしまい、現在、大手門があった場所は道路となっています。

令和3(2021)年に、理想とする仙台城の姿を実現するため『史跡仙台城跡整備基本計画』が作られました。大手門周辺も、大手門の復元を目指して調査を進めています。



仙台城の“ハレの場” 仙台城本丸跡



本丸北壁石垣と本丸大広間跡の遺構表示

築いた人 伊達政宗

年代 江戸時代(1601年～1868年)

場所 青葉区川内

仙台城本丸は、初代藩主伊達政宗によって造られ、二代藩主忠宗が山裾に二の丸を造るまで、仙台藩の政治の中心でした。

本丸は仙台城内で最も高い場所に位置し、大広間をはじめとする数多くの御殿建物が建てられました。二の丸に藩主の生活や政治の場が移った後も、江戸時代を通して重要な儀式や行事などに使用されました。

本丸跡からは金箔瓦を含む瓦類や、当時の高級品である中国産の磁器をはじめとする陶磁器類、珍しい海外製のガラス器などが出土しており、こうしたものからも、儀式や行事の場として使用された、本丸の“ハレの場”としての性格を伺い知ることができます。

仙台城本丸が築かれた頃の日本

徳川家康は、1600年に関ヶ原の戦いで勝利し、全国支配を強めていきました。1603年に征夷大将軍となった家康は、江戸幕府を開きました。

将軍から1万石以上の領地を与えられた武士を大名と呼びます。大名が支配する領域は藩といい、藩では独自の統治が認められました。

伊達政宗も幕府に仙台藩主として認められて、この地を治めていました。また、仙台城も幕府の許可を得たうえで造られています。



230年続いた仙台藩の中心 仙台城二の丸跡



仙台城跡全景(北から) (東北大学提供)

築いた人 伊達忠宗

年代 江戸時代(1639年～1868年)

場所 青葉区川内(東北大学川内南キャンパス)

仙台城二の丸は、二代藩主伊達忠宗によって寛永16(1639)年に藩主の新たな生活と政治の場所として造られました。主に政治の場所である「表御殿」と、藩主の家族が生活する「中奥(江戸城でいう大奥)」に分かれており、建て替えや災害からの復旧など、時代に応じて姿を変えますが、幕末までの約230年間、仙台藩の中心として機能していました。

東北大学埋蔵文化財調査室の発掘調査によって、二の丸の建物跡や災害からの復旧の様子などが明らかにされています。また、二の丸が造られる前の屋敷跡や明治以降の日本軍施設に関わる遺構、終戦後の米軍キャンプに関わる遺構も発見されており、この場所の歴史を知る重要な成果となっています。

仙台城二の丸が築かれた頃の日本

忠宗が二の丸に移った寛永16(1639)年は、三代将軍徳川家光の時代です。徳川家と対立していた豊臣家が大坂の陣で滅び、平和な世となってから既に24年が過ぎていました。この時期は、武家諸法度や参勤交代といった徳川幕府が大名を支配するための政策により、将軍家の権力が確かなものとなった頃にあたります。

このような中、仙台城も戦いに備えた本丸から、より生活しやすく政治を行うのにふさわしい二の丸へ中心が移されたと考えられます。



古代

平安

1190頃

鎌倉

1334頃

南北朝

1392頃

中世

室町

1467頃

戦国

1573頃

安土桃山

1603

近世

江戸

1868

近代

明治

1912

大正

1926

1945

昭和

政宗のプライベート空間 仙台城東丸(三の丸)跡

古代	平安
鎌倉	
南北朝	
室町	
中世	
戦国	
安土桃山	
江戸	
近世	
明治	
大正	
昭和	



発見された政宗時代の池跡

築いた人 伊達政宗

年代 江戸時代(1601年～1868年)

場所 青葉区川内

仙台城東丸(三の丸)跡は、初代藩主伊達政宗によって本丸とほぼ同時期(1601年頃)に造られました。2代藩主忠宗の時代以降は米などを備蓄する蔵が建てられており、絵図などには「蔵屋敷」や「御米蔵」と記されています。現在、この地には仙台市博物館があり、付近には東丸を囲む水堀(五色沼、長沼)や土塁が残っています。

昭和58(1983)年の発掘調査では、池を伴う庭園跡や屋敷跡、茶室跡など政宗時代の御殿跡が発見され、この場所が築城後の早い段階から利用されていたことが明らかになりました。また、水指や茶碗などの茶陶(茶会に関わる陶磁器)のほか、煙管、耳かき、羽子板、碁石などの生活用品や遊具も見つかったため、東丸は政宗が茶の湯や宴会を楽しむ場として使われていたと考えられています。

仙台城東丸が築かれた頃の日本

16世紀後半、織田信長や豊臣秀吉が活躍したころ、桃山文化と呼ばれる雄大で豪華な文化が花開きます。秀吉の家臣として桃山文化の影響を強く受けた政宗は、絢爛豪華な仙台城を築きます。本丸大広間の華やかな装飾や障壁画には、その特徴がよく表れています。

千利休に代表される茶人たちが活躍したのもこの時代です。質素で静かな雰囲気重視する美意識に基づいた多くの茶陶が作られ、美濃焼はその代表です。政宗も茶の湯を愛した武将であり、東丸の発掘調査ではこの時代の陶器が多く見つかっています。



政宗晩年の居城 若林城跡



若林城跡 航空写真(南から)(平成17年撮影)

築いた人 伊達政宗

年代 江戸時代(1628年～1636年)

場所 若林区古城二丁目

寛永5(1628)年に初代藩主伊達政宗が築いた平城です。周囲を土塁と堀に囲まれ、張り出しが4か所設けられた、「守り」を意識した造りになっています。築城後、政宗はこの城で日々を過ごしなが、政務を執り行っていました。寛永13(1636)年に政宗が死去すると城は遺言に従い廃城となり、建物の一部は仙台城二の丸に移築され、城内は藩の薬草園となりました。

現在は宮城刑務所となっており、土塁や政宗が朝鮮出兵の際に持ち帰ったとされる朝鮮ウメ(国指定天然記念物)が現存しています。発掘調査では、城の西側にあった表御殿の建物跡や城内を流れていた六郷堀、大型のゴミ穴などが発見されています。

若林城が築かれた頃の日本

三代将軍徳川家光(在任1623年～1651年)の治世で、江戸幕府の基礎が築かれた時期でした。政宗は幕府の重鎮として嫡男の忠宗とともに家光の治世を支えていました。

この頃になると政宗と忠宗は交互に仙台と江戸を行き来しており、仙台に滞在中、忠宗は次期藩主として仙台城で、政宗は若林城でそれぞれ政務を執り行っていました。



古代

平安

1190頃

鎌倉

1334頃

南北朝

1392頃

中世

室町

1467頃

戦国

1573頃

安土桃山

1603

近世

江戸

1868

近代

明治

1912

大正

1926

1945

昭和

留守氏の居館 洞ノ口遺跡

古代	平安
鎌倉	
南北朝	
中世	室町
戦国	
安土桃山	
近世	江戸
明治	
大正	
昭和	



発掘調査で見つかった堀跡

築いた人 留守氏

年代 戦国時代(15世紀後半～16世紀後半)

場所 宮城野区岩切字洞ノ口

洞ノ口遺跡はJR岩切駅の北側に広がる戦国時代の城跡です。岩切地区を含む広大な領地を支配していた留守氏が城主と考えられています。戦国時代の武士は、戦の時は、岩切城のような山城に立てこもり、戦がない時は、洞ノ口遺跡のような生活がしやすい平城で暮らしていたと考えられています。洞ノ口遺跡は、鎌倉時代に屋敷が造られ、戦国時代に入ると次第に堀が増築されたことで、大規模な城郭になったことが調査でわかりました。中国産の白磁や青磁をはじめ、武士の祈りの様子がわかる塔婆(供養のため塔の形をした木札)、まじないやお経を墨書きした木札も見つかり中世武士の生活の様子が明らかになりました。

城館ができた頃の日本

1467年、8代将軍足利義政の跡継ぎ問題に有力な守護大名の対立が複雑に結びつき、京都を中心に応仁の乱が起こります。この対立は全国へと広がっていき、戦で領地を奪い合う戦国時代が始まりました。

このとき留守氏は岩切地域を含む広大な領地を持つ一族でしたが、後に伊達氏の家臣になります。



中世仙台の中心地 岩切城跡



岩切城跡 航空写真(北東から)

築いた人 留守氏

年代

南北朝～戦国時代(14世紀前半～16世紀後半)

場所 宮城野区岩切字入山ほか

仙台市宮城野区岩切と利府町にまたがる、大規模な山城です。岩切城は、岩切地区を含む
 広大な領地を支配していた留守氏が代々居城としており、伊達政宗の叔父で留守氏18代当主
 の留守政景が元亀年間(1570～1573)に利府城に移ったことにより、廃城となりました。

昭和10(1935)年に行われた発掘調査で、岩切城に関連する建物の柱の跡(柱穴跡)が多数
 見つかりました。この発見は、中世城館の発掘調査で柱穴跡が発見された全国で最初の事例
 になりました。昭和57(1982)年には、東北地方における代表的な中世の城跡として国史跡に
 指定され、現在は、城の中核部分が高森山公園として整備されています。

岩切城が築かれた頃の日本

室町幕府初代将軍の足利尊氏が擁立する
 光明天皇と、それまで政治の中心にいた後醍醐
 天皇が、北朝と南朝に分かれ、対立しました。
 この対立は、全国の貴族や武士を巻き込み、
 岩切城が舞台となった岩切城合戦をはじめ、
 全国各地で戦いが行われました。対立は、
 1392年に3代将軍足利義満が北朝と南朝を
 統一するまで、60年近く続きました。



政宗が拠点とした城 北目城跡

古代	平安
1190頃	
	鎌倉
1334頃	
	南北朝
1392頃	
中世	室町
1467頃	
	戦国
1573頃	
	安土桃山
1603	
近世	江戸
1868	
近代	明治
1912	
	大正
1926	
	昭和
1945	



発掘された大規模な堀跡

築いた人 栗野氏
場所 太白区東郡山

年代 戦国～江戸時代(15世紀後半～17世紀)

「仙台領古城書上」には、16世紀後半までは栗野氏の居城で、関ヶ原の戦いから仙台城の完成までの間、政宗が拠点にしたと記されています。現在、当時の様子は残っていませんが、「館ノ内」、「出丸」、「矢来前」など城跡に関わる字名が残っています。注目すべきことの一つに堀跡の構造があげられます。堀跡の規模は最大で上幅14m、深さ3mと大きく、堀の底は、複雑な段差に加え、高さが1.2mにもなる「障壁」という壁で区切られています。このように堀の底を複雑な構造にすると、敵の動きを阻害し、攻めにくくなる効果があります。このような堀を「障子堀」といいます。

関ヶ原の戦いと政宗

関ヶ原の戦い(1600年)当時、伊達政宗は東軍(徳川方)の武将として会津の上杉氏と対立していました。政宗は慶長出羽合戦という上杉氏との戦いに備えて北目城を対上杉氏の拠点としました。この戦いは北の関ヶ原とも呼ばれています。

発掘調査では近世初め頃の堀跡が発見されており、政宗が北目城の防御力を高めるための整備をしていた可能性があります。



まちのなかに眠る城 富沢館跡

古代	平安
1190頃	
	鎌倉
1334頃	
	南北朝
1392頃	
中世	室町
1467頃	
	戦国
1573頃	
	安土桃山
1603	
近世	江戸
1868	
近代	明治
1912	
	大正
1926	
	昭和
1945	



富沢館跡 土塁全景(北西から)

築いた人 あわの 栗野氏

年代 戦国～江戸時代(15世紀後半～17世紀前半)

場所 とみざわにし 太白区富沢西

富沢館跡は地下鉄南北線富沢駅から西へ約700mに位置する遺跡です。主に戦国～江戸時代の城跡を中心に多数の遺構が発見されています。

城跡周辺には最大で四重の深い堀が巡っていたことがわかっています。現在は宅地化が進み、当時の面影はほとんど残っていませんが、土塁の一部は公園として保存されています。この地域には「館」という字名も最近までは存在しており、まさに城館がこの地にあったことを示しています。

富沢館が築かれた頃の日本

おうにんがん 応仁元(1467)年に起こった応仁の乱以降、室町幕府の影響力は失われていき、領地をめぐる争いが全国各地で起こるようになり、日本は戦国時代に突入します。

現在の宮城県域も例外ではなく、伊達氏を中心として各地で争いが起こりました。

富沢館を築いた栗野氏は仙台市南部を治めていた領主でしたが、伊達氏との争いに敗れると、伊達氏の家臣となります。

栗野氏が伊達氏の支配下に入ると、富沢館には同じ家臣である入生田氏の居館となります。

